

機関番号 : 17301

研究種目 : 基盤研究 (B)

研究期間 : 2008 年度 ~ 2010 年度

課題番号 : 20330188

研究課題名 (和文) 大学での学びを高め卒業時の能力保証を生み出す授業の開発に関する  
実証的研究

研究課題名 (英文) A practical study on development of teaching which assure the  
university students' ability

研究代表者

橋本 健夫 (HASHIMOTO TATEO)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号 : 00112368

研究成果の概要 (和文) : 高等教育のユニバーサル化が進む中で、大学教育の実質化が問われている。つまり、各大学が理念や目標をどのように達成していくか、そして、卒業生の能力をいかに保証していくかが大きな課題となっている。このために、FD や学生による授業評価などを活用した授業改善への試みが進められている。これらは、教員の意識改善には有効であると考えている。しかし、問題はその次の段階である。卒業期の能力保証を行うためには、教員一人一人が卒業時の学生像を共有し、有効な授業の開発を行わなければならない。本研究においては、全ての大学で育成すべき学生像を、「課題を自らのものと捉え、考え、討論し解決していく能力を持った学生」と認識し、様々な授業の中でどのようにその能力を育成していくかを実証的に追究したいと考えた。

大学には様々な分野があり、多様な授業が行われている。本研究の分担者は、それぞれの授業の中で、テーマに掲げた能力の形成に向けた授業を積み重ねてきた。1 年目の実践、2 年目の実践の中で、どの分野の授業であっても、学生たちが自ら積極的に授業に参加しなければ、その目標は達成されないことがわかった。実践を分析する中で、この積極的に参加する原動力は、彼ら自身の納得感ではなかろうかという結論に達した。そして、この納得感をどのように得させるかをそれぞれの授業実践の中で追究し、教員と学生との信頼感の醸成や細やかなコミュニケーションの日常化が不可欠であるとの結論に達した。

研究成果の概要 (英文) : The quality of university education is asked their significance as higher education became more diversified. Thus, universities are faced with the challenge of how to accomplish an idea of what university education ought to be, and how to assure ability of graduate students in their education. Faculty development and teaching evaluation questionnaire by university students have been carried out to improve teaching for these purposes. Although these efforts are helpful to uplift awareness of faculty, it is not enough to enhance student's ability. Faculty need to image how student will be on graduation, and have to share the image each others. In addition, faculties need to develop their class to bring the students close to the image. This study define image of students who are educated in every university as "students who has abilities which involve the task,

think themselves, express their view, and prove themselves”, and examined how to foster the ability in various classes.

There are various major and classes in universities. Members of this research have developed their class to foster the ability of students who were defined in above. As result of two years practice, we realized that active participation in a class was very important to support their ability through teaching, and the motivation of active participation based on sense of assent with a class. Therefore, we need to plan a class to derive the sense of assent, and to encourage students’ active participation. In the view from our challenge in classes, we conclude that it is important to develop communication and trust between a faculty and a student to derive the sense of assent.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	4,700,000	1,410,000	6,110,000

研究分野：人文・社会

科研費の分科・細目：4003（教育学・教科教育学）

キーワード：高等教育、大学の授業、卒業期の能力保証、授業改善、FD

### 1. 研究開始当初の背景

高等教育のユニバーサル化が進む中で、大学教育の実質化が問われている。大学が掲げた理念や目標を達成するためには、学士力保証に向けた明確なカリキュラムの構成とカリキュラムの趣旨に沿って、それぞれの学生の能力を確実に向上させる授業の実施が必要となる。

各大学においては、これらの状況を踏まえ、FDなどを行い、授業改善に取り組もうとしている。ただ、大学の授業は多岐にわたるとともに内容の高度さにも大きな差が見られ、一つの方式が全てをカバーすることにはならない。このためにFDの趣旨が徹底せず授業改善への歩みが見られない状況が続いている。

### 2. 研究の目的

本研究では、大学で獲得すべき能力とは何かを改めて議論し、その具体像を明らかにしたい。

次にその具体像育成に向けた授業を分担者が試み、その成果の共有と分析を行う。

この過程の中で、共通する要因を探り、次の段階の授業に組み込む。この授業を詳細に分析し、上述の能力育成にむけた授業方法を明らかにする。そして、この明らかになった成果を広め、授業改善を進めるためのFDを行う。

### 3. 研究の方法

- (1) まず、卒業期に保証すべき能力とは何かを各分担者の大学の理念をもとに議論し、最大公約数的なものを抽出する。
- (2) (1)で抽出した能力の育成に向けた授業を各分担者が行い、分析を行うとともに、方策の適否について議論する。
- (3) 能力育成に向けての授業の中で効果が見られる方策を明らかにし、次の段階の授業に組み込む。
- (4) (3)の授業を分析し、能力育成に向けた方策をより具体的な形で明

らかにする。

- (5) (4) で明らかになった方策を用いて授業を行い、効果を確認する。
- (6) これらの成果を FD に組み込み、授業改善への歩みを進める。

#### 4. 研究成果

大学卒業期に求められる一般的な学生像を「課題に自ら参加し、考え、討論することができる能力・態度を身に付けた学生」とした。

このためには、課題発見力、合理的思考力、批判力、そしてコミュニケーション力等の育成が不可欠となる。これらを授業の中で育成するための前提は、学生たちが積極的に授業に参加することである。

そこで、この授業に積極的に参加する気持ちをどのように醸成するかについて議論を行った。

その結果、それは学生一人一人の納得感であるとの結論に達した。それは授業力やその中で求められる活動に価値を見出し、自己を制御することができるのは、納得感そのものに他ならないと考えたからである。そして上述の「課題に自ら参加し…」の課題は、授業そのものであると考え、授業への積極的な参加の積み重ねが、能力形成の基本と考えたのである。この納得感の形成には、次のような3段階の過程があると考えた。

##### (1) スタート地点の納得感

これは、授業への興味関心を持つ段階である。この部分においては、シラバスの充実は当然のことながら授業開始時における15週の授業に関するオリエンテーションや教授者の学習者への印象が鍵を握る。

##### (2) 授業過程の納得感

毎時間の目標や内容、及び方法に対する納得感の形成である。授業に参加することによって学習者が理解の深まりや自分自身の成長に対する手応えを実感することが不可欠となる。これによって更なる向上心が芽生え、次の授業に対する意欲も生じてくる段階である。

##### (3) 結果の納得感

15回の授業を終了したのちに、自ら

の成長を振り返ることができるとともに、その成績（評点）に対して納得をする。さらに受講によってどのように生かしていくかを考えるなど、自己向上を継続することの納得感を醸成する場ともなる。

これらの3段階の納得感が、どの授業においても形成され続ければ、目標とする能力の獲得やその保証がなされ则认为している。

また、この3段階のうち②の授業過程の納得感を得る段階には、3つの力が必要となる。「教員の力」、「課題の力」、「仲間の力」である。これらが補完しあうことによって15週という長期にわたる納得感を形成するものと考えられる。この「仲間の力」は学生同士の啓発活動を意味するが、授業過程の中で、学生たちの意見発表の場が十分に保証されなければならないことも強調したい。そしてこの発表の場を支えるのが、課題から生まれる力である。このように考えると、学生をいっどこで主役にするかという緻密な授業設計が欠かせない。これらが教員の力とも言える。当初、研究成果を踏まえたFDも計画したが、その機会がなかった。成果が書籍になったとき改めてチャレンジしたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 橋本健夫・劉卿美、韓国における理科教育、理科教育学研究、査読有、Vol. 51, No. 3, 2011, 127-136
- ② 橋本健夫・Llabe Ruby Tuvilla、フィリピンと日本の理科教育に関する一考察、長崎大学教育学部教科教育学研究報告、査読無、第51号、2011年、35-46
- ③ 鈴木誠、フィンランドの大学入学資格試験、化学と教育(日本化学会)、査読有、59(2)巻、2011年、107-110
- ④ 鈴木誠、遙かなる記憶の彼方から君たちへ、理科の教育(日本理科教育学会)、査読無、60(3)巻、2011年、158-160
- ⑤ 及川恵・大塚雄作・石川裕之、京都大学工学部学生の学生生活と知識・スキル及び適応との関連性、京都大学高等教育研究(京都大学高等教育研究開発推進センター)、査読無、16巻、2010年113-119
- ⑥ 小宮山潔子、学校教員の継続的質保証システム、国士舘大学初等教育論集、査読無、第11号、2010年1-18

〔学会発表〕(計4件)

- ① 及川恵・小川絢子・大塚雄作 他、学生生活の活動が知識・スキルや心理的適応に与える影響―卒業時学生調査に基づいて、日本教育心理学会 第52回総会、2010年8月27日、早稲田大学
- ② 鈴木誠、これからの理科の教員養成をどのようにすべきか、日本理科教育学会 第60回大会 シンポジウム(招待講演)、2010年8月7日、山梨大学
- ③ 杉本孝作、四国学院大学 メジャー制度の導入、大学教育学会 第32回大会、2010年6月5日、愛媛大学
- ④ 橋本健夫・川越明日香、教職大学院の課題、日本高等教育学会 第13回大会、2010年5月30日、関西国際大学

〔図書〕(計3件)

- ① 大塚雄作 他、東信堂、大学教育のネットワークを創る―FDの明日へ―、2011年、232
- ② 橋本健夫、川上昭吾、鈴木誠 他、東洋館出版社、現代理科教育改革の特色とその具現化、2010年、237
- ③ 鈴木誠 他、ナカニシヤ出版、学生主体型授業の冒険、2010年 245

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

橋本 健夫 (HASHIMOTO TATEO)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：00112368

### (2) 研究分担者

大塚 雄作 (OTSUKA YUSAKU)

京都大学・高等教育推進センター・教授

研究者番号：00160549

三尾 忠男 (MIO TADA0)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：20219596

鈴木 誠 (SUZUKI MAKOTO)

北海道大学・高等教育推進機構・教授

研究者番号：60322856

小宮山 潔子 (KOMIYAMA KIYOKO)

国士舘大学・文学部・教授

研究者番号：80225581

川上 昭吾 (KAWAKAMI SHOGO)

愛知教育大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：10033896

杉本 孝作 (SUGIMOTO KOUSAKU)

四国学院大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：30154488

橋本 優花里 (HASHIMOTO YUKARI)

福山大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：70346469

鈴木 慶子 (SUZUKI KEIKO)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：40264189

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：